

自動車運転者教育の近代化の道を拓く

尾久自動車学校 元社長・元会長・相談役 **塩地 茂生**



塩地 茂生（しおじ しげお）略歴

1924（大正13）年 4月 和歌山県で生れる
 1938（昭和13）年 4月 上京 教習所経営の叔父（後 義父）の元で学業のかたわら教習所の仕事見習
 1942（昭和17）年 運転指導を始める
 1943（昭和18）年 4月 日本大学専門部法律科入学
 1944（昭和19）年11月 兵役のため北支派遣軍に入営（石家荘）
 1945（昭和20）年 8月 予備士官学校在学中に終戦、12月帰国復員
 1946（昭和21）年 1月 死亡した義父の跡を継ぎ、戦災焼失した教習所を再開
 1958（昭和33）年 9月 東京自動車教習所協会結成に参画、理事就任
 1961（昭和36）年11月 全国指定自動車教習所協会連合会（全指連）結成に参画、理事就任 教育部門担当
 1965（昭和40）年 7月 尾久自動車学校を小金井市の現在地に移転
 1970（昭和45）年12月 免許制度懇談会委員就任 三期

1971（昭和46）年 7月 警察協力賞 受賞
 1978（昭和53）年 5月 東京教習所協会会長、全指連副会長就任
 1979（昭和54）年11月 藍綬褒章 受賞
 1980（昭和55）年 5月 天皇陛下主催 園遊会に夫妻で招待される
 1985（昭和60）年 6月 60歳を過ぎたのを機に全指連副会長及び東京教習所協会会長を辞任、東京教習所協会顧問となる

各種活動

交通科学協議会、二輪車安全推進委員会、日本交通安全教育普及協会、日本交通心理学会、日本交通心理士会等の役員顧問を務める
 JICA の外国視察団の受入れ（十数年）、青年海外協力隊隊員の現地での安全運転指導に指導員派遣（約十年）、法務省家裁少年友の会の運転再教育担当二十年余
 全国の教習所、団体、企業等で運転者教育について百回近い講演を行う

運転免許制度・歴史の生き字引

敢えてこう断言するのは、その履歴でお分りの様に、塩地茂生氏は昭和13年（1938）上京、学業のかたわら叔父上の経営する自動車教習所の仕事の見習いを始め、昭和17年（1942）には指導員として運転教習に携わったのであるから、恐らくは我が国でも「現存する最古参指導員」と申し上げても差支えなからう。

その間戦時中は、軍用自動車操縦要員（つまり自動車兵）への養成を、ガソリン皆無時代木炭自動車での教習で苦労したこと。そして戦後の進駐軍のジープ疾走の姿に焼跡の街角で目を見張った頃に当時の日本人の抱いた「くるま観や憧れ」なども身を以て体験されたわけであるが、これら当時の貴重なエピソードはいずれも現在の「くるま社会日本」を構成する歴史の一齣一齣と言うべく、不思議な親近感と懐古の気持をかき立てるに十分なものがあ

日本における自動車教習所の近代化を図った国際人

塩地氏は、昭和19年（1944）大学在学中に兵役のために北支の部隊に入隊したが、終戦により復員。昭和21年（1946）1月戦災により焼失した尾久自動車学校の跡を継ぎ、オート三輪車一台で運転教習の仕事再開した。これが現在の「教習所業務の祖」としての第一歩であったと言ってよからう。そしてそこに我々は、塩地氏の運転者教育に対する先見性とその情熱に敬意を表せざるを得ない。

はたせるかな昭和22年（1947）、復興した東京の他の6所（校）と、自動車教習所連盟を再結成し、教習所の復興に務め、更に昭和30年（1955）に



新しい考えで庭園化した教習所である尾久自動車学校（昭和40年）

は東京電力の現業社員に対する機動化計画（自動車の活用）に協力するなど、この頃から社会的要請の高まりつつあった運転者養成の土台作りと組織化の計画を固めていった。

昭和34年（1959）の交通統計（警察庁）によれば、交通事故死者数は10,079名となり、いわゆる「交通戦争」の激化が国家的問題となり、衆議院地方行政委員会のとり上げるところとなった。

塩地氏は、同委員会の公式視察を受け入れ、そこで「交通事故を阻止するための運転者教育の重要性」の提言を行ない、これらの意見は後の指定自動車教習所法制化への布石となった。

昭和36年（1961）全日本指定自動車教習所協会連合会が発足し理事に就任。そして教習カリキュラム作成等積極的に活動を行なうと共に、外国の教習制度や試験制度などの視察を行ない、外国の知己・人脈等を通じて得たノウハウを、我が国の免許制度や試験制度に生かすべく助言を行なっている。

一例としては、初心者若葉マークは、イギリスやオーストラリアなどの初心者（learner）の“Lマーク”を参考にしたものである。

また、毎年いただく年賀状は、各国・各地の交通信号や道路標識等を塩地氏自らが撮影されたものであり珍しいものが多いので、それを楽しみにしている人も少なくないが、この様に「交通安全」にかかわる視点や着想のユニークさや感性の鋭さには敬服させられる。



珍しい外国の標識を紹介する年賀状
アッピア街道のマイルストーン



教習所関係の資料を展示した資料館

生涯を教習所の質的向上に^{じんすい}尽瘁

—率先して学会にも参加研鑽を積む—

塩地氏の持論である「指定自動車教習所は変らなくてはならない」は、何よりも先ず「経営者・指導員が変らなくてはならぬ」とのヒューマンリソースの改革向上を指摘されていることは申すまでも無い。その具体的な例として、様々な警句や提言を耳にされた方も決して少なくは無いと思う。

例えば「教育や指導では生徒は先ず師（ここでは指導員を指す）を信じるのが大切だ、然し信じる前に師を選ぶことが重要である。従って指導員は教習生から選ばれなくてはならない。そしてその為にはそれにふさわしい言葉使い・服装・態度等の外見が整っていることが一番。それに加えて外見ばかりでなく知識・人格の裏付けを伴うものでなくてはならない…」と。

それを身を以て示すために日本交通心理学会に入会、現在は永年の学会に対する功績により、日本交通心理学会特別名誉会員に推薦されている。平成24年(2012)6月に行なわれた「第77回日本交通心理学会」の際、特に企画された「自動車教習所セミナー」の講師として「これからの日本の運転者教育」と題するスピーチで約1時間にわたってその卓見を披露された。

この中で「指定自動車教習所たるもの『公安委員会指定』と言う言葉に甘えてはならない。本当に『指定教習所』として認められるのは、教習生を含めた社会全体からの筈である…」と関係者たちへの猛省をうながす辛口の言葉も出た。



資料館所蔵の世界唯一のナンバープレート
皇太子（現天皇）のフィリピン訪問時の乗用車用プレート



運転免許制度以前の運転手鑑札（大正7年）

これは現在「指定自動車教習所は地域の交通安全教育のセンターたれ」との時代的要請を早くから先取りされた見識の現れと言えよう。

指定自動車教習所協会の発行する「自動車学校」なる機関誌に塩地氏が投稿された「川柳に見る自動車学校のあり方」(平成22年3月～5月号)は、教習所にかかわりを持つ人々ならば誰しもドッキリ！そして思わずにんまりとさせられる傑作が紹介されている。(この中にご本人の作品も?)

「お金出し 怒られに行く教習所」
「教習所 二度と行きたくないところ」



宇留野藤雄氏10年祭での多湖、内海、西田の諸氏と

などは今や過去の遺物であろうが、入校中の指導法についても

「ほめられてのせられ やる気出しました」
「知っていると するとの 間の厚い壁」
と、指導員・教習生双方に釘を刺している。
そして「卒業後の注意」として
「運転は ファインプレーよりノーエラー」
「車より心磨けと 母は言い」

等々は人生の安全運転を巧みに教えた「塩地哲学」ではなかろうか。

スーパーインストラクターの養成を

塩地氏の教習に関する考えの中には、^{なみ}の指導員よりも抜きん出たいいわゆるスーパーインストラクターの養成を目標に掲げて居られる。

そもそも他人にものごとを教えると言うことは、その内容が具体的動作や手法(体の動き)であれ、抽象的概念(理論・観念)であれ、簡単そうで実にその奥は深いものがある。その理由は「教える」—「教わる」と言う一連の「教授—学習行為」は、教える内容のみでなくそれを指導する側の幅広い知識や経験に加えて、人間観や教育観が伴っていかなくてはならぬからである。

世界一の教習指導理論の確立を志向

塩地氏の視察を兼ねた海外旅行から得る情報収集力の素晴らしさには敬服のほかは無いが、外国(特に米国)のインストラクターの指導法の巧みに気付き、それを事有るごとに強調された。

例えば実技指導の場面で、日本人でもアメリカ人で



姉妹校、カルフォルニア自動車学校 J.Hensel氏と(平成8年)

も難しい課題は同じであるが、教習生の所作を見て、日本の様にこまかいことは言わずやらせながら「ミスター〇〇、グッド! グッド!」時にはベリーグッド!!とほめながら教習を進める。そして最後にバツ(然し…)と言って、どうしても改めなくてはならぬ点を指摘しながら進んで行く方法を見て、「これが実に巧みで流石はスーパーインストラクター! 日本でもこういう人材を育てたいものだ…」と熱っぽく語られたことがある。

塩地氏の広い人脈と交友の厚みは、単に人柄の良さのみにとどまらず、交通安全問題や安全教育に関する多彩豊富な経歴や業績とあいまって日本国内は勿論、海外にも知られていることでもよく分かる。

尾久自動車学校に設置されている交通資料館の中に陳列されている展示物の中に一際、目を引くのが縦横80×120cmの星条旗、言わずと知れたアメリカ合衆国国旗である。この星条旗は、ワシントンの国会議事堂に1980年5月15日に掲揚されたもので毎日新しいものと取り換えられるが、何らかの功績者に対し敬意のしるしとして与えられると言う由緒ある貴重品なのだとか。恐らくは日本の要人たちの中でもこれを贈られた人は少ないのではなかろうか。

この様な輝かしい経歴は、昭和54年(1979)の藍綬褒章受賞や、昭和55年(1980)の昭和天皇主催の園遊会に夫妻で招待されたこと等々にも直結する。

塩地氏の「教習」と言う仕事を通じ、我々に語りかけようとする情熱から、学び取らなくてはならぬ宝の山が、多く存在していることに改めて気付かなくてはならない。

(日本交通心理士会会長・広島大学名誉教授
文学博士 西山啓)